

竹の杖



本紙に城郭の特集記事を発表なさっている三木靖先生主催の「南九州城郭談話会」に第二回目から夫婦で参加している。もう五年も前からなるだろうが。昨年は姑が病んでいたので遠出はしなかったが、余程のことが無いかぎり参加して来た。剣呑な岩剣城の登頂や、夜神楽見物を兼ねての高千穂から阿蘇に向かつての山城探索、調査中の佐土原見学など、忘れえぬ場所が指折り数えても十指に余る。自分たちでは決して訪れることのない、また行ったとしてもここが城跡などとは気づくはずもない山をよじ登るのである。

この五月は大隅の高山城址とのこと。夫の高校時

代の友人で、帰郷してからの旅仲間H夫妻と前日の昼にフェリーに乗って垂水に渡った。私はかねてから吾平山陵を訪れたかったのでこの機会に連れて行ってほしいとHさんに頼んでおいたのだった。

午前中は雨だったが、薄日が射してきた。若葉の緑が揺れる中を標識を頼りに入口にたどり着いた。

Hさんはきれいに整備された清流の岸辺に興ざめの面持ちである。昔は自然の草原で、飯ごう炊さんをしたと言ふ。こうした幻滅の感慨は誰もが味わっていることではないだろうが。今や手つかずの自然がどんなに貴重なものになっていることが。

山陵の岩の前では一人の男がけたたましくモーターの音を響かせて作業をしている。見ると落ち葉を下に吹き飛ばしている。静かなたすまいで浸りたものとしばらく待っていたがやめないので帰途についた。休憩所で聞くと作業をしていたのは神主さんだとのことである。神主さんには竹ぼうきの方が似つかわしいのにと語り合った。

三木先生方と鹿屋のビジネスホテルに一泊して翌

日は高山町。教育委員会の用意してくれたバスに乗り換えて、はやばやと植え終わつた水田の中を抜けて城の麓に着いた。我々のために山道を整備して案内板も立てられていた。これは何処に行つてもその地の教育委員会の方々の熱意と努力が伺えることで、その都度感謝の気持ちで一杯になる。高山町のキャッチフレーズが面白い。「歴史を未来に生かす町」。

例によつて落ち葉を踏みしめ坂道を登る。途中折り返しがあつて、登る人と細い道でかち合つ場所があつた。「こつちが近い」と脇の道でない所を抜ける人がいて、二三人が続いた。私も従つたが、胸ぐらいの高さの急坂があつた。両脇の灌木につかまつて登るうとした時、目の前に先のしゃくれた杖が差し出された。大柄な男の人がその杖で次々と引き上げていたのだ。私はそれに助けられて一気に登つた。前に行くその人は、無言で近くの細竹を切つて杖を作り私にくれた。頼り無い登り方をしている私を見かねたのだらう。それは本当に役に立って、私はそ

の杖をつきつき曲輪を巡つた。

ふとテレビで見たチベットの村人が、一週間もかかる険しい山の聖地に巡礼に出るのだが、途中竹を切つて杖を作り、巡礼のあかしとして持ち帰つて、家の宝物にするという話が頭をよぎつた。私は捨てがたい気持ちになつて、それを家まで持ちかえつて物置に仕舞つた。

高山の城址の本丸に集ひたる

人々の肩に揺るる木漏れ日

軍勢を集め数へしてふ丘に立ち

甲冑のきらめく幻を追ふ